
見知らぬ地で・・・

可児

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見知らぬ地で・・・

【Nコード】

N0112BA

【作者名】

可児

【あらすじ】

ある一人の大学生がある日、見知らぬ土地で目覚める。その世界では魔法が存在しており魔法が使いたかった主人公は喜ぶが実は主人公は魔法が使えなかった・・・やがてその世界で起こっている戦争に巻き込まれていく主人公たちの物語。

第1話：プロローグ

あらゆる魔法が存在する世界・・・そこには4つの国がありそれぞれが統治していた。

火の国「ベレヌス」王、ルー・テオリツグが統治する国、ルー・テオリツグは若くして国の覇権を握った知略家であり、強大な魔力を有している。

水の国「テスラ」王、オルペノス・テスラが統治する国、この国の王は争いを好まず、国民の声を聞くことにより統治を行ってきたがその姿を見た者は一部の側近のみであり本当は王がいないのではないかと言われている。

風の国「エアームド」王、シペシュ・エアームド、この国では7人の賢者が意見を持ち寄り王と共に政略を練っている。

土の国「ダグダ」王、イルガヌス・ダグダが統治する国、イルガヌス・ダグダは4人の王の中で最も年を取っておりその経験から堅実な政治を行っている。

4つの国は険しい山脈や砂漠、大河に阻まれ交易などはさほど行われることは少なく、平穩に時は過ぎていたがある時、一つの国がその平穩を壊してしまった・・・

これはそんな世界の物語

第1話：プロローグ（後書き）

初の投稿です！

まだわからないこともたくさんありますができるだけ投稿していこうと思うのでよろしくお願いします！

第2話：出会い

「・・・!？」

木漏れ日のなか草木の騒めきで目が覚めて啞然としている少年は、今年最後の忘年会を終え帰宅後いつも通りに床につき、また平凡で退屈な一日を迎えようとしていた大学生だ。
冷静さを取り戻しつつ頭を働かせていると近くの茂みが動いた、それに驚き後退りしながら茂みの方を見据えていた。

「気がついたのね」

茂みからそう声が聞こえると、蒼髪で蒼眼の少女が両手一杯に様々な木の実や果実を持って出てきた。

安心したためか溜息とともに地面に座り込み少女に声をかけようとしたが

「・・・」

(ん・・・声が出ない?)

いくら声を出そうとしても音を発することなく空気だけが喉を過ぎていくだけだった。

「お腹空いてない？」

少女がそういいながら果実を1つとりこっちに差し出していた。

戸惑いながらも手に取り口に運び一口、そうするとまた一口と手が止まらなくなり充たされていくのがよくわかる。相当空腹だったのだろう・・・

「気に入ったみたいね」

そう少女が言うと、食べながら頷く。
食べ終わると少女は不意に立ち上がり言った。

「泊まる場所がないならついてきて」

そう素っ気なく言い放つと残っている果実を拾い歩き始めた。突然の出来事に慌てながら急いで少女の後を追いかける・・・

少女の後をついていくと、どんどん山腹に向かって歩いていくようだ。しかし傾斜はさほどなく道も舗装されている訳ではないが、決して歩きにくい訳ではない。人がよく通っている道なのだろう・・・少女はというと黙々と歩いており疲れた雰囲気も見せない。少女の姿は華奢だが割と背が高く、さり気無い起伏を描いている。髪は蒼髪ショートで色白な肌をしており、白いワンピースのようなものを着ていて、それがさらに少女の肌の白さを引き立たせているようだった。

日も陰り始めた頃に、ようやく村に着いた。やはり、村の人たちも赤や緑などの人もいるが、多くが青髪で青眼だった。村の中を歩いているとやけに視線が痛い。いくら見知らぬ人が来たからと言って、これほどの視線は来ないだろというくらい視線が集まっているのがわかる・・・

(ん？ああ、これが原因か・・・)

ふと窓に映った自分の姿を見たら、黒髪で黒目、周りには黒髪黒目

は全くいない、これではあまりにも浮いてしまう。

(ここでは黒髪黒目はいないのだろうな)

と溜息をつき歩いていると、少女の前に果実が転がってきた。転がってきた先を見ると男の子がこけていて、転がった果実の方を見てじっとしている。

「大丈夫？」

少女はそう言い、果実を拾い男の子に差し出すと男の子は奪うように果実をとり、背を向けてすぐに立ち去って行った。少女も何もなかったように足を進める。

(礼くらい言うものだろ)

と思いつつ後に続く。村を歩いていると少し開けたところに出たと思つたらすぐに家があった。どうやらここが少女の家のようにだ。

「待ってて」

そう言うと家の中に入って行った。周りを見渡すと畑のようなものが放置してあって、畑の先に家が固まって立っている感じだ。中には、ほかの建物よりも一際大きな建物もある。

(ここは若干村から外れているな。)

「ついてきて」

色々と考えていると、少女が出て来て来てそういうとまた村の方へ歩き始めた。少し歩くとさっき見えていた一際大きな建物にやってきた。そこに入ると外観とは裏腹に、ごく普通の内装でポツンと老婆が椅子に腰を掛けている。

「長老、泊まる場所がないという人がいたので連れてきました」

「おお、見慣れぬ風貌の少年じゃの。どこから来たのじゃ？」

(いや聞かれて声が出ないから答えられないのだが・・・)

とりあえず、ジエスチャーで声が出ないことをアピールしてみるが

「どうしたのじゃ？」

長老には伝わらなかったようで困っていると

「道中もまったく声を出すことがなかったので声を出す事ができないのかもしれない」

(ナイスだ！)
と思い頷く。

「それは不自由じゃの。サーシャよ、しばらくの間面倒を見てやりなさい。」

(サーシャっていつのか。)

「わかりました、では失礼します」

「少年よ、少し残りなさい。」

少女は家を出て行き、家の中で長老と二人きりになると話が始まった。

「サーシャのことを含めて、おぬしに話しておかないといけないことがあつてのお。村人のサーシャに対する態度はもう気づいておるう。村人は皆サーシャの事を恐れてるのじゃ・・・」
それから時間の流れは速かった、サーシャの事、村人の事、この国の事話を聞き、サーシャの家に帰りながら聞いた話について考えた。家に着くころにはもう日が暮れていて、入るとサーシャは夕食の準備をしている。

「帰つたのね、座っていて」

そう言われ座っていると、食事が並べられ夕食が始まった。長い沈黙が続く・・・

「長老から聞いたでしょ」

唐突にそう言われ頷く。

「そう、恐ろしいと思うならいつでも出て行っていいからね」

首を横に振る。しかし、サーシャはただ黙々と夕食を食べるだけだった。

(・・・)

「あなたはここで寝て」

そうベッドのある部屋に案内され

「この部屋を自由に使っていていいから」

と言つとすぐに扉を閉めどこかに行った。

(ふう・・・)

緊張が解けベッドに倒れ込む。そして部屋を見回すベッドと机、椅子、本棚があるだけのなんとも殺風景な部屋だ。

(この部屋がサーシャを育てた人の部屋だったのかなあ・・・)
そして再び長老の話を思い出す。

第2話・出会い（後書き）

拙い文章力ですがこれからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0112ba/>

見知らぬ地で・・・

2011年12月31日05時46分発行